

氏 名	谷村 隆志
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第359号
学位授与年月日	平成23年9月14日
審 査 委 員	主査 教授 関根 浄治
	副査 教授 廣田 秋彦
	副査 教授 田中 恒夫

論文審査の結果の要旨

器質的な疾患がないにも関わらず胃もたれ、胃痛などの上腹部症状が出現する Functional dyspepsia (FD) における症状出現の機序については多くの研究が行われてきたが、近年、上腹部症状と十二指腸内酸環境との関連が注目されている。そこで無線式 pH センサーの固定法を改良した十二指腸内 pH 測定法を考案し、十二指腸内 pH が安全に測定可能かどうか、また測定した十二指腸内酸度の変化と上腹部症状の出現との関連性を明らかにすることを目的に研究を行った。健常人6名を対象に、無線式 pH カプセルにつけた7cm長の輪状ナイロン糸部を、内視鏡下に前庭部小弯の胃壁にクリップにて固定後、pH カプセルを十二指腸下行脚に留置。その24, 48時間後の空腹時に胃管より無作為の順で300mlの0.1N塩酸或いは蒸留水を胃内へ10分間で注入し、注入開始より30分後までの上腹部症状の変化と十二指腸内酸度との関連を検討した。被検者全員安全に十二指腸内 pH 測定が可能であった。30分間における十二指腸内 pH 4.0 未満%時間は酸注入時に蒸留水注入時に比べ有意に高値で、各種上腹部症状の程度も酸注入時において蒸留水注入時に比して高度であった。代表的な症状である胃もたれと上腹部鈍痛を比較すると胃もたれ症状は上腹部鈍痛に比して早期から症状が出現し、症状の程度も高度であった。十二指腸酸度と上腹部症状との関連では、十二指腸内 pH 4.0 未満%時間が高くなると上腹部症状がより強く出現しており、上腹部鈍痛とは有意な相関を認めた。無線式 pH センサーの固定法を改良した十二指腸内 pH 測定法を用いると、十二指腸内の pH が安全に測定でき、また上腹部症状の出現と十二指腸内酸度の関連性の検討に有用であることが明らかになった。